

現代人は、自分にとつての不都合（不便・不快・不足）を排除し、自分の思い通りに物事が進むことのみを良しとして、結果的に非常に個別化された生活を送るようになりました。あらゆることが私事（プライベート）となり、不都合の他者を否定したり無視して、自己中心の欲望充足を最優先してきたようです。しかし、他者の排除によって目的を達成するなどということが、本当に幸せでしょうか。

本校の教育の柱となる教育理念の四番目は「同朋（友とともに歩む）」です。それは、安心して共に生きる大地（弘誓仏地）に立つ（樹心）ことで成り立ちます。

仏教のお話では、よく「ただ生きているんじゃない、生かされて生きているのだ」と言われます。私が私として生まれ、私として生きているという奇跡のようなことが、今ここに成り立っているのは、想像を絶する支えによるのでしょうか。それは人間にとどまらずあらゆるもの、いわば自分以外のすべてが私一人を生かしている。すなわち、私は生かされて生きているということです。ただ、現代社会の中で子供たちは、そのことをまるで「生け簀の中で生かされている（生きさせられている）」ように受け止めていて、「生かされている」という言葉のすれ違いもあるようです。

私たちは、確かに生かされ支えられて生きていますが、同時に何か誰かを生かし支える存在でもあるのです。つまり、今この私がこの世に必要なのです。今この私がこの世を支え成り立たせている一人なのです。それは何かをしているからということだけでなく、私の存在そのものに意味があるのです。どのいのちもそうなのだと思います。親子においても、子は（宿った時から）親に生かされ親を生かしています。親は子に生かされ子を生かしています。（もちろん、親子以外の無量の関係があります）。生かされ支えられている私のいのちと、また私が支え生かしているそのいのちと、ともに大事に生かし合って生きなければなりません。

では、（他を）生かす私はどうあればよいのでしょうか。どんな私になればよいのでしょうか。生かす私として成長するには、今私が努力して身につけるべきことは何でしょうか。自分と他者という時、他者は自分の進路を妨げる者ではなく、私を支え、また私がその人を支えている関係にあるというのが、仏教の「縁起」の考え方です。私以外の人（他者）は必要な重要な人なんだと、他者の存在意義を知ることが大切です。私は私以外のものが成り立たないと成り立ちません。同時に私がいないと私以外も成り立ちません。具体的内容は分かりませんが、私は間違いなく何か誰かを支えている。何かができただけからではなく、私が今ここに生きているということが何か誰かを支えている、そういう者として世にある。さらに言えば、私が一番いて欲しくない嫌いな人が、私にとつての significant other（重要な他者）なのです。そこが見えないから、戦争になるのでしょうか。戦争は、他国や他民族の命や尊さを見失った姿です。今あなたが殺そうとしているその相手は、あなたにとって必要な大切な人なんだということです。他殺のつもりが、実はつながりたいのちの中でのことなのです。自分に都合の悪い人と共に生きる覚悟がいります。そして、自分も他者も変化していることも忘れてはなりません。

私はかつて故郷での生活の中で、過疎の問題とは、言葉のやりとりや挨拶の交わり合い、また心の配り合いというコミュニケーションが過疎になることであって、単に人口が減少することが問題なのではないと知らされる経験をしました。平安時代の僧源信は『往生要集』の中で、地獄とは「孤独にして同伴無し」と言っています。

また、生まれて以来食べてきたいのちは、私がいきいきと生きること、そのいのちを生かすことになるでしょう。

私たちのできることには限りがありますが、それぞれの苦手と得意を組み合わせると、不思議とうまくいくものです。支え合い語り合いながら、ともに歩みを進めましょう。